

「男、突っ走る！」

第  
116  
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

田代美紀	一横村田	高橋	稲本	磯村	林田	石松	辻澤	赤澤	林原	加原	北上	加上	上島	谷岡	住吉	木内	木内	木内	木内	
(16)	(21)(24)	(13)	(11)	(17)	(11)	(11)	(12)	(12)	(13)	(14)	(23)	(36)	(29)	(36)	(58)	(43)	(21)	(52)	(54)	(25)
ヒロイン役の女優	大学院生	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』会計担当兼メンバー	『スリジエネ』アカデミー演技講師	『スリジエネ』アカデミー演技講師	『スリジエネ』アカデミーダンス講師	雅也の弟	雅也の母	雅也の父	『オフィスツリーイン』代表										

1 神社

雅也と美紀がセリフの確認をしあつて  
おり、横田や日向、スタッフたちが撮  
影機材等の準備をしている。

N「二〇二一年正月。三箇日の休みを経てす  
ぐの一月四日、横田監督の自主映画

『tenderloin』の撮影が行われました。ク  
ランクインした九月の頃と違い、外は肌寒  
く、キャストスタッフ一同、ロケには一苦  
労でした」

× × ×

カメラの前でスタンバイをしている雅  
也と美紀——横田がカメラを見ており、  
日向やスタッフたちも用意をしている。

横田「ではシーン二十一、テイクー、よい  
スタート」

カチンコを鳴らす日向。

神社でお参りをする演技をする雅也と  
美紀。

雅也演じるレイ、ちらりと目を開けて、

拝む美紀演じるミュを見る。

とても真剣にお願い事をしている美紀。

雅也「なにお願い事したの？」

美紀「えー？ お母さんの疲れが吹き飛んで、

家の前の猫が喧嘩をやめること」

雅也「何それ」

美紀「だって、声枯れるくらい喧嘩してんだもん。そんでー、世界が平和になるようにって」

ニコニコ笑って、世界の全てを愛するような表情をする雅也。

雅也「そっか。俺が幸せにしてやんなきゃな、

ミュを」

美紀「え？ なんで？」

雅也「だって、じゃなきゃ、誰がしてくれるのかなって、ふと思った」

美紀「優しいね、レイは。え、じゃあ、よろしくお願いします」

横田「カットッ」

カチンコを鳴らす日向。

横田「OK。じゃあ、次レイのアップ行きま  
す」

機材の準備をするスタッフたち。

N「二ヶ月近くのブランクがあつたが、不思議と僕は、今回の主人公、レイの役にすんなりと入ることができました」

× × ×

時間経過。夕方。

横田「ヒロイン、ミュ役の田代美紀さん、クランクアップです」

拍手をする一同——日向が花束を横田に渡し、横田が美紀に花束を渡す。

横田「お疲れさまでした」

美紀「（花束を受け取り）ありがとうございます  
ました。（と一同に）横田監督の作品には、  
他にも出演させていただきましたが、ヒロ  
イン役は初めてでした。難しい役どころで  
したが、とても良い経験をさせていただきました  
ました。本当にありがとうございます」

拍手をする一同。

N 「ヒロイン役の田代美紀さんがクランクアップを迎えたのは夕方でしたが、僕はまだ一人のシーンがいくつも残っており、撮影は夜まで続きました」

## 2 バスの中（夜）

道を走るバス。

雅也 演じるレイが、愁いを帯びた顔で車窓からの景色を眺めている——その雅也の表情を、カメラを担いで撮影している横田。

横田 「カット。オッケーです」

雅也 「ふうー……」

横田 「良い表情が撮れました」

雅也 「本当ですか？」

横田 「やっぱり、木内さんを主役にして良かったです」

雅也 「光栄です。最初、主役のお話をいただいたときは、どうなるかと思いましたが」

横田 「普段、『スリジェネ』で演技の基礎を

学んでいらっしやるからでしょうね。撮影を重ねるごとに、演技が自然になっていったような気がします」

雅也「スリジエネで演者デビューしてから、ずっと舞台だったでしょ。映像の演技は初めてだったので、多分カメラ慣れしてなかったんでしょうね。本当に良い経験をさせてもらいました。主役なんて、もう二度とできないかもしれませんからね」

横田「いえいえ、そんなことは。この映画をきっかけに、何かオフア―に繋がるかもしれませんよ」

雅也「まさかあ」  
笑い合う雅也と横田。

### 3 名古屋美術大学・映像編集室（夜）

日向がパソコンで作業をしている――  
ドアが開き、雅也と横田が入ってくる。

日向「お疲れさまでした」  
横田「無事に撮り終えたよ」

日向「どうでした？」

横田「良い画が撮れた。愁いを帯びるって、まさにあんな感じなんだろうね」

雅也「恐縮です」

横田「三人だけになってしまいましたけど、ここで木内雅也さん、クランクアップです」

拍手をする横田と日向。

雅也「ありがとうございます」

横田、花束を雅也に渡す。

横田「主役、本当にお疲れさまでした」

雅也「（花束を受け取り）ありがとうございます  
ます。映画初出演、そして初主演で、こんなにも難しく、やりがいのある役をやらせていただいたことは、本当に光栄でした。

まだ声の収録は残っていますし、スタッフの皆さんにおかれましては、二月中旬の横田監督の映画祭に向けて、最後の編集作業等まだいろいろ残っているとは思いますが、こうしてクランクアップを迎えられたのは、共演者の皆様、そしてスタッフの皆様のお

力添えがあつてこそだと思っております。  
完成を楽しみにしています。本当にありが  
とうございました（と一礼する）」

もう一度拍手をする横田と日向——頭  
を上げて微笑む雅也。

#### 4 住吉ダンススタジオ

住吉がカーテンコールの演出をしてい  
る——雅也、まひる、美穂子、千世、  
亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀  
樹、美香、沙耶が指示に従いながら動  
いている。一同、マスクをし、なるべ  
く距離を取っている。  
メンバーたちが、逐一入り口前に設置  
されているアルコール消毒で手を洗っ  
ている。

N 「その週末は、新年最初のスリジェネアカ  
デミーが行われました。成果発表会は四月  
の中旬と決まり、今は住吉先生の演出のも  
と、カーテンコールの練習をしていました。

しかしコロナ禍の間で、運営で作成したガ  
イドラインに則り、レッスン中は常にマス  
ク着用をし、適度な換気と消毒を行わなけ  
ればならず、また演出上を除いてはソーシ  
ヤルディスタンスで稽古をしなければいけ  
なかったので、コロナ前と比べるととにか  
く不便でした」

住吉「はい、じゃあ初めから行くよ」

一同「はいッ」

住吉、ラジカセのスイッチを押す――

BGMが流れ、手拍子でリズムを刻む。

住吉「はい、ワンツースリーフォー、ファイ

ブシックスセブンエイト……」

隅で待機している秀樹と沙耶、美香と

琴音、亜里沙と香奈枝、美穂子と千世、

隆太と翔、雅也とまひるの組み合わせ

で、それぞれでリズムとタイミングに

合わせて出てくる。

## 5 同場所く表

休憩中。

中で打ち合わせをしている典江、譲治、  
理絵——それぞれ台本を見たり、水分  
補給等をしているメンバーたち。

外で深呼吸をしている雅也、秀樹、ま  
ひる。

まひる「そういえば、うちー、無事にクラ  
ンクアップしたんですか？」

雅也「うん。長かった」

秀樹「お疲れっした」

雅也「ありがとう」

まひる「完成、楽しみですね」

雅也「うん。まだ、声の収録は残ってるんだ  
けど、撮影が終わったってだけで、ひと段  
落したと言うかさ」

まひる「そういうもんですよ」

秀樹「これで、こっちに専念できますね」

雅也「まあね。映画の役はさ、現在のシーン  
では大学生の役で、回想シーンで高校生の  
役やったんだよ、洗先生と」

まひる「二人も制服着たんでしょ？」

雅也「制服って言っても、カッターシャツに黒いズボンだけどね」

秀樹「うちーと洗先生が高校生役って、何だか面白いですね」

まひる「確かに」

雅也「失礼な。こっちだって、ピチピチの高校生の頃があっただよ、今のヒデみたい。今だって、こんな若いメンバーたちと一緒にやってるから、気持ちは十八のまま。でいるつもりなんだから」

秀樹「十八よりも、うちーは八十の方が似合いますよ」

雅也「（目を細めて）ヒデ、後で裏来いよ」  
まひる「ああ、ブラックうちーが出ちやいましたね」

秀樹「すいませんでした」

雅也「だって考えてごらんよ。今回の成果発表会のうち演劇があるのは、十五分のショートミュージカルと、十分の短劇と、五分

の短劇の三つあるでしょ。俺は三つとも出るけど、このうち十分の短劇じゃ、俺がヒデの後輩役なんだよ。しかもヒデが元気な大学生で、俺が引きこもりの高校生。実年齢七個も上の俺が、ヒデの後輩役やるって、なかなか厳しいものがあるんだよ」

まひる「でも稽古中は、そこまで違和感ないですけどね」

雅也「それはマスクしてるからだよ。顔の表情が分からないからね」

まひる「ああ、それはあるかもですね」

と、ドアが開き、谷岡が顔を出すと、  
谷岡「うちー、まひる、ちよつと良い？」

雅也・まひる「はい」

と、中へ戻ってくる雅也、まひる、秀樹。

雅也「何ででしょうか？」

譲治「今ね、演目の順番を決めてたんだよ。」

たださ、衣装替えのことを考えると、最低でも演目が続かないようにしなきゃと思っ

て調整してるんだけど、みんな結構演目の  
掛け持ちが多いじゃん」

雅也「そうですね」

譲治「だからさ、もしうちーの負担になら  
なければ、うちーとまひるの五分短劇の  
直後に、谷岡先生演出の十分短劇を持って  
これないかと思って」

まひる「うちー、どうする？」

雅也「（譲治に）五分短劇のほうは、内容が  
スイカ割りなので、衣装は半袖のイメージ  
ですか？」

譲治「まあ、そうだね」

雅也「となると、場面転換中に、ジャンパー  
か何か上着を羽織る早着替えができれば、  
演目が続いても何とかなるかと思えます」

理絵「（谷岡に）お母さん、どうしようか？  
それなら、行けそうな気もするけど」

谷岡「衣装の相談も、またしなきやと思って  
たんだけど、十分短劇の方でうちーがや  
る役って引きこもりの役じゃん。だから、

フード付きのコートかジャンパーを着てほしいのね。だから、スイカ割りの短劇が終わってすぐに、そのコートを羽織る余裕があれば、そうしてもらおうと助かる」

まひる「じゃあ、短劇終わったら、私が着替え手伝います。この後、私はエンディングのカーテンコールまで出番ないので」

理絵「じゃあまひる、うちーのフォローしてもらって良い？ 一応リハーサルの時に、そこも確認するから」

まひる「大丈夫です」

譲治「じゃあ、一旦はそんな感じで」

谷岡「リハの時に実際にやってみて、もし厳しかったら遠慮なく言ってね。リハから本番までは二週間あるから、他の案も考えられるから」

雅也「分かりました」

## 6 木内家・全景（夜）

N 「それからわずか数日後のこと……」

7 同・居間

真保が台所で洗い物をしている――雅也が入ってくる。

雅也「ああ、事務所寒いわ」

真保「そりゃプレハブのあの造りじゃ、冷気を吸収しちゃうもんね」

雅也「いくら暖房つけてるって言ってもさ、やっぱり足元から冷えるでしょ。何回足つりそうになったことか」

真保「運動しなさいよ」

雅也「やだ、体動かしたくない」

真保「そんな人が今じゃ演劇やったり、ダンスやったりしてるんだもの、おかしな話よね」

雅也「まあ成り行きだもん、しょうがないさ」

真保「映画の上映、いつだっけ？」

雅也「来月の中旬。名古屋でやる」

真保「母さんも行こうかな」

雅也「え、来るの？」

真保「だって、我が息子が映画の主役やったのよ。内容はさておき、気になるじゃない」

雅也「約五十分間、あの大きなスクリーンに我が息子の顔がずっと映ってるんだよ。それ、耐えられそう？ 吹き出したりしない？」

真保「大丈夫よ。二十何年、その顔見てきたんだから」

と、風呂上がりの孝志が入ってくる。

孝志「おお、寒い」

真保「ヒートショックには気をつけなさいよ。この時期多いんだから」

雅也「うちの脱衣所、暖房ないから、風呂あがった瞬間急激に冷えるもんね」

と、玄関のドアの開閉音が聞こえる。

雅也「（訝しそうに）ん……？ 健帰ってきた？」

真保「夜勤だからって、つい一時間ぐらい前に出たばかりなのに」

と、険しい顔をした健次郎が入ってくる

る。

健次郎「ただいま」

孝志「今日夜勤じゃないのか？」

健次郎「体調悪くて、オーナーから帰るよう  
に言われた」

雅也「体調って、どっか悪いの？」

健次郎「何か、呼吸がしづらくてさ……。

（と咳き込む）

雅也「乾燥してるから、風邪でも引いたんじゃないの？」

健次郎「オーナーから、PCR検査受けるよ  
うに言われた」

真保「まあ、接客業ならしょうがないか」

健次郎「明日、受けてくる」

真保「とにかく今日はもう寝なさい」

健次郎「ああ、そうする（と出ていく）」

孝志「大丈夫か、あいつ？」

真保「ただの風邪だと良いんだけどね」

雅也「まさか、コロナ？」

真保「だからPCR検査受けるんでしょ」

不安そうな顔の雅也。

N 「翌日、弟は車で地元の保健所まで行き、  
PCR検査を受けてきました」

8 同・健次郎の部屋（翌日）

咳き込んだ健次郎がベッドで休んでい  
る。

N 「しかしその日から、弟の症状は悪化して  
いきました。PCR検査は、検査を受けた  
翌日には結果が出ると聞いていたので、僕  
たちは保健所からの連絡を待っていました」

9 同・事務所（翌日）

雅也がパソコンで仕事をしている。

N 「そして、更に翌日のこと……」

真保が勢いよくドアを開けて、入って  
くる。

雅也 「どうだった？」

真保 「健、PCR陽性だった」

雅也 「じゃあ……」

真保「コロナに感染した」

雅也「やっぱり……」

真保「不特定多数の人がコンビニには来るもんね。それに、マスク忘れて買いに来る人もいるし、商品に手を付けたらそこから感染する可能性だってあるもんね」

雅也「それで、健はどうなるの？」

真保「保健所からの迎えが来て、ホテル療養になるって」

雅也「そう……」

真保「それに、同居の家族も濃厚接触者になるから、PCR検査受けるようになって」

雅也「……」

N「その日のうちに保健所からの迎えが来て、弟はホテルへと向かいました」

## 10 保健所・駐車場（翌日）

車が止まっている——運転席に孝志、

助手席に雅也、後部座席に真保。

全身防護服に身を包んだ保健所職員が、

PCR検査用の試験官を窓越しに渡す。

N 「翌日、僕は父の車で保健所に行き、唾液  
収集によるPCR検査を受けました」

11 木内家・全景（夜）

12 同・居間

孝志がテレビを見ている——台所で真  
保が夕飯の支度をしている。

雅也が入ってくると、台所の下に置い  
てある一升瓶を持ち出す。

真保 「何、もう飲むの？」

雅也 「どうせ濃厚接触者になっちゃったんだ  
から、二週間近くは外出できないんだか  
ら。ちよつと飲むぐらい良いでしょ」

孝志 「保健所から毎日食事が届きますって言  
われても、こんな軟禁生活が二週間も続く  
なら、飲みたくもなるわな」

雅也 「でしょ」

と、食器棚から小さい器を取り出すと、

日本酒を注いで飲み始める。が、険しい顔になる。

N 「お酒の味がしなかったのです。僕は元々慢性鼻炎だったので、これは鼻づまりの症状だろうと自分に言い聞かせていました。まさか自分がコロナに感染し、味覚障害になっっているとは思いたくなかったのです」

13 同・全景（翌日）

N 「その翌日の午前のこと……」

14 同・居間

固定電話の受話器を戻す真保——傍らに孝志と雅也。

真保 「家族全員、陽性だって」

唾然顔の一同。

つづく